

7月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

ビールの恋人真夏の7月が終わった。ビールを美味しく飲むためにという不純な動機を神様は見逃さなかった。猛暑を狙って「暑かったら、もっと熱くなれ」と叱咤激励して1日2回のウォーキング、ランニングと張り切ったら軽い熱中症に。体調が良くて熱く生きようと張り切っていた矢先、暑さに屈辱の敗北。総じて、研修会、クリニック、インターハイと試練の7月をなんとか乗り切ることができた。

1・BS・朝日テレビ番組『昭和偉人伝・作詞家阿久悠』から

◆「現役であるということは、戸籍年齢と意識年齢を競争させることである」(阿久悠)
生涯現役でいることが残された人生の大きな目標である。60歳還暦はもう一度子どもに戻るためのターニングポイントであるということをはかして読んで気がする。それ以後、私の意識年齢は57歳に戻っている。毎日やるのが盛りだくさんなのは幸いである。

2・読書から

◆「学びは最高のレジャーだ」「定年後の目標はやはり“いい顔”で過ごすことだろう」
(楠木新著『定年後』)

毎朝じっくり新聞を読むことから一日がスタートする。わからないことが盛りだくさんに気づかされる。「わからなかったことがわかる」は「できなかったことができる」に相当する人生の至福のひとつである。ビールと共に至福の時間が増えれば、シワシワの爺顔がシワ合わせ(幸せ)の「いい顔」になるだろうか。

3・新聞のコラム等から

◆「最近、ジョーダン最後のシュートを決めて勝った試合も多いが、外して負けた試合も多いという意外な事実を知った。将棋のタイトル戦でもフルセットまで行って負けてしまうことがある。残念で、徒労に終わってしまったような疲労も残る。ジョーダンの話を知ってから、“次の機会に挑むために必要なプロセスなのだ”と割り切れるようになった」
(羽生善治の一步千金『挑み続けたジョーダン』)

プロ棋士から勝負に対する心構えをたくさん学んだ。棋士がバスケットから学んでいるとは思ってもよらなかった。さすがジョーダン。超一流はジャンルを越えて学ぶ。

◆「みんな、どっか痛いところありますからね」(大相撲夏場所小結嘉風が稀勢の里を破る)
怪我は勝てば美化され、負ければ言い訳になる。アスリートは誰もがあちこちに痛みや故障を抱えている。それらも実力の一部である。「痛い、痛いの、飛んで行け!」で克服。
◆「年をとること自体が未知の世界に一步ずつ足を踏み入れていくこと。こんなに楽しい冒険はない」「いのちは時間。時間を大切に」(医師・日野原重明さんの言葉)

私の父は、母が亡くなってから「俺は100歳まで生きる」と公言していたが84歳で逝った。父の果たせなかった未知への遭遇をこの私が。「明日いいことあるように」を待ち遠しく思いながら、今日の学びの時間を大切にしながら生きて行こう。

◆「すべての困難は、自分の人生をドラマチックにするために起こる」(書籍紹介・帯津良一著『いつでも死ぬる』)

生涯現役でいるための条件は「ヘラクレスの選択」(困難への挑戦)あるのみ。